〈報告〉

シンポジウム「文化形成における酒の役割」

（第37回白山祭参加企画）

二〇〇一年一一月一七日（土）
東洋大学白山校舎一一〇一番教室

Ⅰ　酒の民俗　　大島　建彦
Ⅱ　酒の文化誌管蠡　　新田　幸治
Ⅲ　泡盛の歴史と文化――古酒づくり運動を通して　　島袋　正敏
Ⅳ　泡盛の古酒づくり　　謝花　良政

はじめに

司会　横川　伸

民俗にみる「酒」は単なる嗜好品ではなく、新しい人間関係の締結と連帯の強化、死穢の払拭など多様な機能が存在しております。現在でも神事や人生儀礼、身近なことでは人の接待などにも「酒」はつきものです。

世界のいたるところに酒あり。酒は人類の生活とともに歩んできました。アジア・アフリカ文化研究所は、長年、アジア地域における文化の比較研究を行ってきておりますが、今回は「文化形成における酒の役割」と題し、中国、日本、そして沖縄の「酒」をテーマにシンポジウムを企画致しました。

最近テレビに発泡酒のコマーシャルが盛んに映し出されます。少し前に、分類だ、税率だと世間を騒がせていたことは記憶に残っていると思います。これも一つの文化的現象です。

今回我々が議論するところの酒とは、広い意味での、エチルアルコールを含有し酔いを催す飲料のことで、人類が最初に口にしたものは、自然の恵みによるものだと思われます。心身に不思議な効用をもたらすこの酒は、独自の酒文化を展開しながら、人類の文化形成に多大な貢献をしてきました。

酒の不思議な力に魅せられた我々の祖先は自分たちで酒を作ることを覚え、しかも大量に作る技術を徐々に開発したのです。それに伴い酒の飲み方も「人神共飲」から「人人共歓」へ、「晴」の酒から日常の「褻」の酒へと変化し、いまでは常に色々な人がさまざまな酒を飲んでいます。

飲酒が一般化すると同時に酒を規制する動きも出てきました。現に地球には宗教による「禁酒」の文化が主流を占める地域も存在しますが、今回のシンポジウムは日本と中国の飲酒文化に焦点を当て、文化形成における酒の役割を検討するものです。

日本と中国の文化交流の中間地点に位置しているのが沖縄です。泡盛の古酒づくりでは、良質の甕をまず手に入れ、女房の肌を優しくさするように、甕を撫でたり揺すったりして、対話するのが秘訣だそうです。人類が酒を自分で作り始めたころも器の解決が先決であったことは容易に想像できます。酒造業が今日の近代産業に発展し得た背景には酒造技術の進歩があります。この古酒作りの話から酒造技術における先人達の優れた叡智と創造の数々の一端に触れることができ、あらためて文化形成にとっての酒の重要さを知ることができるでしょう。